

平成 27 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：平成 27 年 4 月～平成 28 年 3 月

1. 学校概要

学校名 高岡市立成美小学校
 種 別 ☐ 保育園・幼稚園 ☒ 小学校 ☐ 小中一貫教育
☐ 中学校 ☐ 中高一貫教育 ☐ 高等学校
☐ 教員養成 ☐ 技術/職業教育
☐ 特別支援学校 ☐ その他 ()
 所在地 〒933-0917
富山県高岡市京町 1-1
 E-mail eseibis-02@city-takaoka.jp
 Website http://seibi-e.el.tym.ed.jp/
 児童生徒数 男子 211名 女子 158名 合計 369名
 児童・生徒の年齢 6歳～12歳

2. 実施活動（複数選択可）

- ☐ 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- ☒ 国際理解
- ☐ 世界遺産
- ☐ 平和・人権
- ☒ 環境
- ☐ 気候変動
- ☐ 生物多様性
- ☐ エネルギー
- ☒ 防災
- ☐ 食育
- ☒ 伝統文化
- ☐ そのほか ()

3. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

成美型ESDの取組

身近な事象（人、もの、こと）に働きかけ、関わりやつながりを大切にしながら主体的に活動する子供の育成を目指して

I 成美型 ESD 教育の重点

本校が ESD（持続可能な開発のための教育）の取組を開始して3年目に入った。東日本大震災以後、将来の日本の未来を担う子供をどう育てるのかを問われている。本校では、「自立」と「共生」を教育目標の柱に掲げ、全教育活動を ESD の視点で見直し、教育課程に位置付けて ESD の研究推進を図ってきた。これまでの実践に引き続き、「身近な事象に働きかけ、関わりやつながりを大切にしながら主体的に活動する子供の育成」を目指して研究に取り組んでいる。

今年度は、以下のことに重点をおいて研究を進めている。

- ① 今だからこそ学ぶ価値のある単元を構成する。
- ② 地域に積極的に足を運ぶことで子供の問題意識を促し、自分ごととして課題解決を図る学習過程を工夫する。
- ③ 防災、伝統継承、環境教育等、各学年の特徴を生かした取組を展開し、保護者や地域に発信することで、表現力の向上を図り、他者評価により子供の自信を深める。

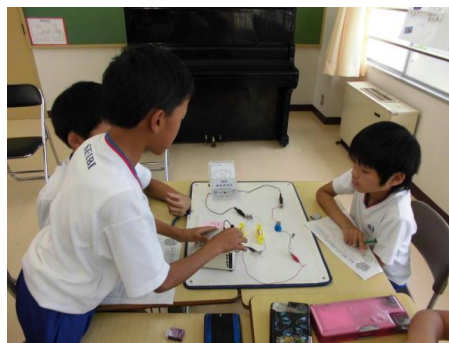
II 成美小学校 ESD 年間研修計画

		研 修 内 容
つかみ	4 月	・ ESD について共通理解・全体計画作成 ・ 昨年度の ESD カレンダーを基にした活動計画の見直し
	5 月	・ ESD 研究会に向けての授業検討会（高学年部会）
自分	6 月	・ 一人一授業研究（通年）（ESD の視点をもつ）
	7 月	・ ESD 講座公開研修会① ・ 1 学期の取組の振り返り
	8 月	・ 成美小 総合30年の歩み振り返り 成果と課題を共通理解 講演 元校長 長尾順子先生 ・ 東海北陸ユネスコスクール交流会 成美小の ESD 取組紹介
	9 月	・ ESD 推進校視察 県内推進校 他 ・ 富山ユネスコ協会と東北交流の打合せ ユネスコ協会 水上 庄子先生
	10 月	・ ESD 推進校視察 県内推進校 他 ・ 学習発表会 ESD パネル展示
つながぎ	11 月	・ ESD 研究会に向けての授業検討会（低学年部会） ・ 授業参観（ESD の視点を取り入れた授業公開） ・ 感謝のつどい 各学年の ESD の取組発表 東北 陸前高田市立広田小学校との交流活動 代表児童 6 名他 ・ ESD 講座公開研修会②
	12 月	・ 2 学期の取組 振り返り
まとめ	1 月	・ 「研究のまとめ」執筆
	2 月	・ 「ESD 富山シンポジウム」参加（代表児童 6 名） ・ 「ESD コンソーシアム」にて活動報告 ・ ESD カレンダー見直し （来年度へつなぐ） ・ 3 学期の取組 振り返り

Ⅲ 研究の実際

～ESD講座公開研修会①から～

4年 理科「電気のはたらき」



○単元について

主体的に取り組むための課題のもたせ方

まず、子供たちが「問題を発見」するように仕掛け、解決したいと思わせるようにした。直列つなぎと並列つなぎを電池ボックス2個と豆電球をつないだ実物を黒板に固定して示した。また、乾電池1本だけの回路も用意して、明るさを比較できるようにした。直列つなぎ、並列つなぎの順に乾電池を1本ずつ入れていった。そして、それぞれ2本目を入れたとき、直列つなぎのときは明るくなったのに、並列つなぎでは明るさに変化しなかったことに、「あれ？」と疑問の声を上げた。さらに、1本の乾電池を交互に外したり、入れたりして見せた。直列つなぎの方は、消えたが、並列つなぎは、常に同じ明るさを保っていた。ますます、子供たちの「あれ？」という反応が大きくなっていった。この後、不思議に思ったことを発言させながら、「どうして並列つなぎは、乾電池を2個使っているのに、乾電池1個分と同じくらいの明るさなのか」という課題を作り上げた。

見通しをもった実験計画を立てるために

課題に対して、予想を立て、その予想を確かめる方法を考え、どのような結果になれば自分の予想が正しいといえるのかという見通しをもった実験計画を立てさせた。片方の乾電池しか働いていないと考える「片方」説や合流するところで電気が詰まってしまう「つまる」説、それぞれの乾電池から半分ずつの電気が流れて、合わせて1本分になると考える「半分」説など全部で7種類の考えが出てきた。

一人一人が自分の考えをもたせ、考えが同じ仲間同士をグループにした。自分たちの考えをもう一度確認し、この考えを確かめる方法も考えた。そこで、「自分たちの考えが正しいければ、実験結果は〇〇になるはずだ」というところを十分に話し合った。共通理解できたところで、互いの考えをできるだけ簡潔に分かりやすく説明し合う学習活動を取り入れた。この活動では、互いのグループの考えを熱心にメモを取りながら聞く姿が多く見られた。

実験の準備では、協力して電池ボックスや検流計をつないでいた。実際に操作してみると、一人では、到底難しい作業であった。同じ目的をもった者同士だからこそ、真剣に考えて図の通りに実験準備を行うことができた。

ESDの視点で行う学習での教師の必要な役割

教師の必要な役割は、「子供たちが問題に気付き、それを学ぶ価値を感じながら、目的意識をもって学習が計画され、そして自分たちの問題として体験的に、仲間と関わり合いながら学んでいく」学習プロセスをデザインすることである。さらに、物事を多面的・総合的に考えたり、批判的に考えるプロセスをとることも必要である。今後は、議論によって、物事をより深く考える体験をさせたい。

○4年理科 参観者の感想

「〇〇な実験をして予想が正しいければ△△になるはずだ」という仮説が子供一人一人の中で非常に明確であった。そのことが「自分の〇〇説が正しくない」とはっきり言える根拠となっていた。実験前に実験方法や予想を考えさせることについて大変勉強になった。

ESD 講演会記録

平成27年7月3日

ESD 研修会 講演会「今、なぜESDか？」

富山大学人間発達科学部 教授 松本 謙一先生

(1) 西嶋教諭 4年「電気のはたらき」の授業から

◎子供にどのような力を育てるか

西嶋先生は、単元の中で子供の「あれ？」という現象を見せるために今日公開された。「直列にしたら明るい」という知識を入れるだけならすぐできる。実験で確かめただけならテストの点数は取れるはずである。しかし、先生の願う姿は、子供たちが問いをもち、問題解決をきちんとできる子供たちを育てることである。子供たちが「こうでもない、ああでもない」と考えることを体験させるために本時を設定した。そこがこの授業をした意味だと考える。



まず、驚いたのは実験用具をいくつかの学校から借りてきたのか？どうみても1つの学校ではない。装置を組むだけでも大変だったと思う。先生は、装置の確認をするだけで、子供たちに作らせることを大切にしたい。その時間こそ実験の力を付ける意味でとても大切である。何回も確かめ、体験を通して協力する姿を子供たちが学んだのではない。本当は、もっと時間をかけて実験をやりたいかたかもしれない。仮説を立て、実験方法を考え、「こうなったらこうなる」と考えることが授業の核である。

◎子供同士が聞きたくなる状況づくり

課題は同じだが実験方法が異なる子供たちに、どのように関わらう状況をつくるか。全ての班の発表を聞くのは子供にとって辛いことだと思う。ネームプレートを持たせ、問いに対しての結論だけ見えるようにしたらどうか。そうすることで、少数派の意見を聞きたくなる状況が生まれる。

◎「はっきり分かん」と発言する子供をどう捉えるか

今日の授業で一番感動したことは、後半の話合いでのK児の「はっきり分かん」との発言である。はっきり言えなかったら普通挙手しないのに、勇気のある素晴らしい子供である。いつも簡単に答えが出るなら、授業もつまらない。自分の思う結果にならず、「どうもこの仮説ではないらしい」と分からないことが分かったことに価値がある。それが授業の本質に向かう原動力になる。

(2) ESD の理念と学校目標

ESD の共通点は、儲からないことである。私利私欲は一切ない。自分のことだけを考える子供を作らない、周りにいる仲間と認め合って生きていくという理念は、成美小学校の学校目標と一致している。教育で一番大切なことだと考える。問題解決学習や一人一人の考えを認め合うこと、これまで成美小学校で行ってきたことの全てが ESD につながる。ESD に取り組むことで、子供が誇りに思えるものやプライドが生まれる。それだけでなく教員の方向性が一つになる効果もある。ESD のホームページを通してその価値を保護者も理解し、協力を得ることができる。また、地域の方々の協力も得られることになる。



富山県の学力向上の面からも子供たちは将来にわたり、文化を継承しなければいけない。一方、ESD のように全教育課程を通して一人一人が認めてもらえる体験をすることも、とても大切なことである。私たちが目指しているものは学力向上だけではなく、人格の形成と文化の伝承である。ESD の視点は、まさに学校目標

そのものである。その中で、どのように子供に対応するかが ESD の鍵である。教師が子供をどう受け止めるか。子供は、教師の真似をする。教師次第である。

(3) 子供の追究を支える教師の役割

(けんちゃんが、先生に寄ってきた)

T: けんちゃんどうしたの?

C: お山作ってトンネル掘っていたら、上は熱かったけど、下は冷たかったよ。

T: そうなの?じゃあ、先生も行ってみようかな。

(触ってみて) 本当だね。どうしてかな。面白いこと見付けたね。

子供は、当たり前のことを言い先生のところに来るだろうか。子供が教師に報告に来るということは、その子にとっては当たり前ではない。「本当だ」と教師が言った瞬間、子供の表情が変わる。それが、子供を一人一人認めることだ。先生が自分のことを分かってくれたと認識する瞬間である。それは、子供が教師に話した「内容」ではなくその子が言いたくなっている「気持ち」を受け止めることにつながる。

今日の理科の授業は分からない子供が増えた。分からないことが分かったことは成長である。「そうだなあ」と言ってあげないと肩すかしになる。子供をまずよく見ることである。

課題が「〇〇で遊ぼう」だと、自分の好きなようにやれる。ついつい「なぜか?」を先生の誘導でやりたくなる。それは、子供にとって大きなお世話かもしれない。子供が求めているものと教師が求めているものが異なるからである。その子が未来に向けて何をしたいかが鍵である。子供の気持ちが分からない時は、聞きければいい。ほとんどは、もともとの願いの延長線上で活動していくだろうが、その時に「おお、頑張れ。それでいい」と励ましてあげたらいい。少しくらい遠回りでも考えていける子供を育てたいものである。その子は今、何を願っているのか、それを一緒に考えていく、それこそが ESD 教育そのものではないか。

～ESD 講座公開研修会②から～

2年 生活科「うきうきあそびランドであそぼう」

○単元について



2年生では、「なかよしのわを広げよう」を大きなテーマとして学習を行った。本単元では、ペットボトル、空き缶、段ボールなどの身近な材料を使って遊びを工夫し、「うきうきあそびランド」を開いた。友達と力を合わせれば、みんなで楽しく遊ぶことができるということに気付かせたいと考えた。

導入では、教師が作ったものを紹介したり、参考図書を教室に置いたりした。それを参考にして、自分が遊びたい遊びを考え、各自で作って遊んだ。作る楽しさや、もっと楽しいものに作り変えていくおもしろさも味わうことができた。

子供たちは、友達と一緒に遊んだり、遊びを教え合ったりしながら、友達と関わり始め、力を合わせて大きな遊びにつなげる動きが出てきた。グループで活動することで、ダイナミックな遊びを作り上げていくようにしたい。そうすることで、共に作り上げる喜びを感じ取ることができるようにする。

また、意見が合わなかったり、困ったことが起きたりしたときには、グループや全体で話し合う機会をもった。「うきうきあそびランド」をみんなで作り上げているという

意識をもたせ、協力して取り組むことの楽しさを実感させた。

できあがった「うきうきあそびランド」では、お互いに遊んでみることで、楽しさを共有し、十分にうきうき気分を味わわせる。そして、単元の終わりには、楽しい思いを「1年生にも味わってもらいたい」という願いをもたせる。仲間と共に「1年生にもうきうき気分になってもらおう」という相手意識をもって活動することを通して、人と関わることの楽しさや喜びを感じてほしいと考えた。

○2年生活科 参観者の感想

子供たちが遊んでもらう対象を意識し、工夫を考え、楽しく生き生きと活動していました。他のグループのアドバイスも積極的に行い、子供同士の関わり合いがとても素敵だと思いました。活動の充実ぶりが子供たちの制作したものから伝わってきました。

言葉を大切にした掲示、コーナー作りも子供たちの意欲を高めていました。最後の話し合いの場面をもっと見たかったです。

6年 総合的な学習の時間

「未来プロジェクトS ～命のためにできること～」

○単元について

東日本大震災をきっかけに、本校では「自分で考える防災活動」を進めてきた。避難訓練では、一人一人が考えて行動できるようになってきた。また、他者のことを気遣う姿も見られるようになった。そこで、自然災害や防災について理解を深め、「命」を守るために真剣に考えて活動してほしい。そして、最高学年となった今、他者を思いやり、自他の「命」のためになる防災の在り方を考えてほしいと願った。

4月の避難訓練では、火災発生時に最高学年として何ができるか考える場を設け、これまでの自分の行動を振り返る機会を設けた。自分の防災意識の低さを感じる中で、本当に大災害が起きたとき、自分の「命」や大切な人の「命」を守れるだろうか、自分たちにできることは何だろうかという思いをもった。その思いを基に、「未来プロジェクトS～『命』のためにできること～」という単元名を提示した。

まず、自分たちの地域は、「安心」「安全」な場所なのか実際に調べに行く。また、自然災害に関する専門家や防災活動の従事者の話を聞いたり、成美地区合同防災訓練に向けての図上訓練に参加したり



した。そして、地区のお年寄り、園児の「命」を思い描き、彼らのために何かできないかと考える場をもった。そのことで自他の「命」を見つめる視点を広げることができた。

さらに、被災地の新聞や写真、ネパール大地震や鬼怒川の堤防決壊などの資料提示により、遠い場所で苦しんでおられる方へ思いを馳せることもできた。「東北やネパールの支援をしたい」、「大切な人の防災意識を高めたい」、「教えてもらったことや防災の達人のことを広めたい」、「地域のお年寄りや園児たちと絆をつくりたい」など、共

通の思いをもつ仲間同士で活動を進めた。

子供たちが他と関わり合いながら、相手の立場になって行動できるようになってほしいと考える。その姿勢が、今後大人になったときにも持続することを願っている。

○6年 総合的な学習の時間 参観者の感想

子供たちの活動が本当に充実していたことが発表から伝わってきました。地域の方がたくさん関わってくださる成美の地域性に驚きました。今後は、一人一人が学んだことが発表の中に出てくるといいと思いました。

話し合いでは、様々な気付きが生まれました。お二人の先生方の板書、発問も子供たちの考えを深める上で大変効果的でした。

平成27年11月30日

ESD 研修会 講演会「ESDと成美の実践」

富山大学人間発達科学部 教授 松本 謙一先生

(1) 経塚教諭2年生活科「うきうきあそびランドであそぼう」の授業から

◎子供の本気を引き出す

「子供に見通しをもたせる」といわれるが、なかなか子供が本気になれるのではないかと。ユネスコスクールは子供たちが本気になって遊んで楽しむことに重点を置いている。授業参観で家族も招待したそうだが、どんどん子供たちは遊びの世界を広げていく。でも、大切なのは、招待者を通して子供が本気で楽しむことである。



◎子供が本気で関わる状況をつくるための手立て

子供たちが活動途中で互いに書いていた赤と青の付箋は必要だったのか。私だったら、行きたいところに何枚かシールを貼らせる。誰が貼ったのか名前さえ書いてあればよい。そのコーナーで子供が遊びたいと思うかがポイントである。付箋が多いところと少ないところが歴然とできる。もし、付箋が少なかったら、「なぜぼくの所に来ないの？」とその人のところに本気で子供は聞きに行こうと思うのではないかと。それを基に本番のあそびランドにつなげてほしい。

(2) 土合・屋鋪教諭 6年 総合的な活動の時間

「未来プロジェクトS ～命のためにできること～」の授業から

◎6年間の追究活動の集大成・本時の意味

6年生は、成美小学校の6年間の集大成で「こんな子供が育っている」という公表となった。しかし、これで終わりではなく全校や地域の方に伝えていく必要がある。

子供たちは授業が始まる前から一生懸命練習し真剣にやっていた。自分のやりたいことについて追究活動を広げている。子供が本気だと多様性も生まれる。だからこそ、そこに子供の生き方が現れる。これを学年で一緒に追究活動を展開したところもすばらしい。学年がチームを組んで地域に出かけ、息の長い活動を続けている。本時の授業は、全ての子供が着実に活動してきたこと、子供たち一人一人が主役になり自信をもてる場にしたことに大きな意味があった。そして、今日は互いの追究を仲間に伝え、感じ合う場だった。今日は、チームでやったことを発表する場だったが、「僕の学びはこれです。理由は・・・」と言い切れる子供たちに育ててほしい。この学びを今後、全校児童、地域の人たちにも伝えていく必要がある。



◎教師にとってのやりがい

成美小学校は、子供の成長を6年間や9年間がゴールではなく、もっと長い目で子供を捉え育てようとしている。子供が地域にどんどん働きかけると、やがて地域を動かす原動力になる。これを教師が感じることができたら楽しいし、それ以上の価値があると感じることができたなら教師としてのやりがいになる。教師自身も挑戦しないと、子供はワクワクしないものである。

(3) 子供の心を育てるチャンスを逃さない

子供は大人が思い付かないことを言う時がある。人間は知恵が付いて成長するにつれ、自分に関係のないことには関わらないようになるが、でも「おやっ」と立ち止まり、聞いて認めてくれる大人の姿勢があればどうだろうか。子供の中には、たくさん温かいものが生まれるのではないか。子供が行ったことや伝えようと思ったことを立ち止まって聞いてくれる大人がいないと、子供は遠回りしてでも育つチャンス、機会がなくなる。

(4) モンゴルの教育事情から日本を考える

◎本物を見る意味

9月にモンゴルに訪問した。結論は、「本物を見る(大切さ)」ということである。成美小学校においても陸前高田市を訪問し、被災地の現状を実際に見た児童6人は、ものすごい学びをしている。今後は、その6人がどのように他児童や地域に伝えていくかが重要である。

◎モンゴルの子供たち ～貧富の格差が生み出すもの～

モンゴルでは、走っている車のほとんどがトヨタのプリウスが多かった。石油の値段が高いからハイブリッドの車が売れる。首都ウランバートルは大都会だけどゴミだらけだった。「マンホールチルドレン」もいた。彼らは、労働者か臓器売買に利用されていく悲しい現実がある。しかし、モンゴルの国にとっては都合がよい。それは、犯罪の温床だったからである。

一方、モンゴルの田舎は、まだゲルとバラック建ての住居が存在する。ゲルで暮らす子供たちも小学校へ通う中、特別支援教育が最大の問題であった。学校は、高岡市ほどの村に1学級しか存在しない。教育が十分になされていない。保育園は、一部の裕福な子供だけが通っている。田舎へ行き驚いたことは、国道1号線が、わだちだけの道で水を汲むことが子供の仕事であった。日本は子供に家の仕事をさせないのが当たり前になってきているが、モンゴルでは水汲みは子供の仕事だった。

◎モンゴルの教育事情

モンゴルでは、学校が不足しているから、午前と午後に分けて授業を行っている。給食は、肉まんとお茶のみで教室は50人学級だった。机は全て前を向き、先生が一方的に説明する授業だった。20分間説明し、20分間ひたすら黒板を写す授業である。高等学校も同じであった。でも、先生が信頼されているからやっていける。教科書は貸し出し制で一切書き込み禁止で図書室は教科書を整理する場所であった。隣のグラウンドへ行く時は、塀の穴から出入りする。まるで、戦後の日本と同じだった。賄賂も存在する。40年前ほどの車種が多く走っている中に高級車が混ざっている。権力を握ったら賄賂で暮らしていける国である。

◎みんなの幸せを考えることができる子供に

世界の中には教育をまともに受けることができない子供もいる。日本のように物が溢れ、教育が行き届いている国はほんの一握りである。日本の恵まれた環境の中で、他の色々な国のことを考えられる子供たちを作らないといけな。成美小学校のように東北まで行き本物を見てきた子供たちは間違いなく大きな学びをしていると思う。自分たちの今の幸せに溺れることなく、自分だけの利益を考えるのではなく、みんなの幸せを考えて活動する子供たちを育ててほしい。使命感をもって子供の成長を楽しみながら活動してほしい。

IV 年間を通じたE S Dの取組

① 第3学年「ぼくたち・わたしたちの町、大発見！」

社会科と総合的な学習の時間の関連を図り、地域の「すてき」を見付ける活動を継続して行った。獅子舞を継承するために尽力する人や地域住民同士の交流を活発にする公民館活動のお世話をする人など、自分の地域を愛し、支える人々との出会いがあった。2学期には、「成美のすてき大発見報告会」を開催した。児童から総合でお世話になった方に招待状を送ったところ、たくさんの方が参観してくださった。3学期には、一人一人が体験したこと、そこで考えたことを写真と文章でまとめて、保護者や地域の人へと発信した。

② 第4学年「成美小 環境未来プロジェクト」

夏休みに向けて行う「環境チャレンジ10」をきっかけに、身近な環境を守るためにできることを考え実践した。2学期には、節電の呼びかけ、アルミ缶の回収・リサイクル、使用済み割り箸の回収等、児童の発想を大切にした取組を行った。特に、割り箸回収は地域住民に直接働きかける活動を行い、たくさんの割り箸を集めることができた。割り箸の原料となる木材を生み出す森林の中での活動も行い、自然の恵みを受けて私たちの生活が成り立っていることを実感した児童らである。

これらの体験は、将来、地球温暖化という課題を自分事として受け止め主体的に周囲に働きかける資質・能力の向上につながると考える。

③ 第5学年「歴史都市高岡 伝統受け継ぎ隊」

本市は「日本遺産」の町に認定され、北陸新幹線開業と相まって多くの観光客が本市を訪れている。歴史や伝統の溢れる町であるが、そのよさに気付いていない児童もいた。そこで、本市独自の教科「ものづくり・デザイン科」と総合的な学習の時間の関連を図り、本市の魅力、よさ、可能性を考える場をもち、地域振興のために自分にできることを実践した。年間を通じて市内の史跡や歴史的建造物の見学、それらを支える人へのインタビューなどを繰り返し行い、10月には北陸新幹線の体験乗車を行った。

その後、自分が見付けた本市の魅力を市内外の人に発信するため、パンフレット作りや「高岡の魅力」発表会を行った。

④ 第6学年「未来プロジェクトS ～「命」のために自分にできること」

東日本大震災を教訓に、自分たちの身の回りの人々の命を守るためにできることを考え、実践していった。8月には、校区の総合防災訓練に進んで参加し、その経験を基に、9月に6年生が中心となって児童による避難訓練を行った。全校を巻き込んだ全校防災会議も随時行った。地域の高齢者や保育園児への働きかけの場を設定し、守られる側から守る側へと児童自らが視点を変えていった。

一方で、福祉活動にも力を入れた。4月25日のネパール大地震発生の際、6年の児童はいち早く募金活動を行い、県内の富山ネパール文化交流協会の方を本校に招待し集まった募金を手渡した。東北の被災地を支援するための募金活動等にも継続して取り組んだ。

⑤ 東北交流訪問（11月）

本校は、東日本大震災以降、本校教員が被災地支援ボランティアで訪れた岩手県陸前高田市広田地区の人々と交流を続けている。児童会では、募金活動で集めた義捐金や学校花壇で育てた花で草木染めを行い制作したハンカチ、米づくり体験で収穫したお米の配達を継続してきた。この活動を始めた当初は、本校の教員が広田地区を訪問し、児童のメッセージカードや義捐金、義捐米等を届けていたが、今年度は、代表児童による交流訪問が実現した。

実際に代表児童が被災地を訪れたことで、被災者が今まで一度も表出しなかった自分の思いを語るなど、成果があった。

⑥ 「成美っこ集会（東北交流訪問報告集会）」（1月）

手と手をつなぐことで、一人ではできないことも実現することができる。東北

交流訪問に向けて、代表児童だけでなく、全校児童全員で被災地の人々のためにできることを考え実践していった。自分たちの活動を支えてくださった地域の人を招待し、代表児童が交流訪問の活動報告を行った。

V 成果と課題

- 地域の事象（人・もの・こと）と直接関わることで、問題意識が生まれ、自分ごととして問題を捉え、追究意欲を高めることができた。また、関わる喜びや地域の一員としての自覚、自分たちが支えられていることを感じることもできた。
- 「自分にできること」を考え、実行しようとする意欲も育ってきている。地域と自分との関わりを意識した児童の自主的な活動が増えた。
- 子供が自ら地域に足を運び、関わることで地域もさらに元気になり、学校を中心にした地域の活性化につながっている。
- 子供は、自分の活動を認められる体験を積むことで、少しずつ自己有用感を高めている。
- ESD を軸に全校体制で、継続的に追究を進めてきたことで、多様な表現活動や発信の場が生まれ、子供の表現能力、コミュニケーション力が向上している。
- ESD は、小学校教育の目的である「自立」し、「貢献」できる子供の育成に直結する取組である。本校の取組を市内の学校に紹介し、ESD の考え方を広く普及していきたい。
- 既成の活動内容に捉われることなく、教員一人ひとりがイマジネーションを働かせ、この地域だからこそ、この地域に生きる子供だからこそ紡いでいける単元を今後も構成していく。
- 教員の異動等で構成メンバーが替わっても、本校ならではの ESD を推進できるように本校の教育理念を共有する場を設定していく。

(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- ☒ 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
☒ 時間外活動の時間を使用
☐ ユネスコクラブの活動として実施
☐ その他（ ）